

ユリイカ

Eureka
詩と批評

1

増頁特集

グレン・グールド

G・グールド
『G・グールド書簡集』

◆
坂本龍一／浅田彰 **対話**
2032年のグレン・グールド

◆
レナード・ローズ **インタビュー**
チェリストのみたピアニスト

◆
G・ベイザント
樋口隆一
村上陽一郎
高橋英夫
青柳いづみこ
長木誠司
土屋恵一郎
権木野衣
椎名亮輔
和田則彦

K・バザーナ
加藤総夫
千葉文夫
大里俊晴
宮澤淳一
上野耕路
玉井國太郎
許光俊
桂英史
根本豊實

◆
ディヴェルティメントグールド **図版構成**
略年譜+CD一覧

◆
新連載
山田宏 新ビデオラマ—もうひとつの映画館
鹿島茂 『バサー・ジュ論』マルジナリア



チェリストのみたピアニスト

【インタビュー】レナード・ローズ

聞き手=ダニエル・クンズィ 訳=伊藤制子

「グレン・グールドは、互いにとりてお互い、ウエア・オリエ・オースカー、ジュネウスキととも、ストラトフォード・フェスティバルの音楽監督を務めた。三人が共演したのは以下のよりなる曲目である。バッハの《音楽捧げ物》、《フーガの技法》（共演ナショナル・フェスティバル・オーケストラ）、「ウェイオラ・ダ・カンパのためのソナタ」、テレビのために収録したベートーヴェンの《エレクトロピアのためのソナタ第三番》、同じベートーヴェンの《三重奏》、作品七〇の第一、ブラームスの《チェロとピアノのためのソナタ第一番》、メンデルスゾーンの《変調の（チェロソナタ）》である。このインタビューは、ローズの亡くなる数週間前に行われた。

レナード・ローズさん、グレン・グールドとお会いになったときは、どのような状況でしたか？

ローズ グレン・グールドと会ったのは、ずいぶん前のオンタリオでのストラトフォード・フェスティバルのときでした。そのときのプログラムもとても素晴らしいものでした。ね、かなりたくさんの曲を一緒に弾きましたよ。そして事実上三年間、グレン、オスカ・ジュムス

キー、私の三人組で音楽監督を務めたわけですよ。グールドとの共演の様子についてお話しただけですか？

ローズ 彼はもちろん天才でした。これについて疑う余地はありません。また少々常識を逸したところもあって、ほんとうに変わり者でしたよ。彼がフェスティバルで演奏していたのは、いたって夏でしたが、想像を絶する暑い気候でも、窓を開けることはとてもできません。グレンがなによりも恐れたのは風邪を引くことだったからですね。彼と一緒に演奏したり録音したりすることは、とても楽しいでしたね！ グレンの真の天才ぶりを示すエピソードを一つ披露したいと思えます。ストラトフォードで共演したのは、とても美しいペーター・ヴェーバーの長調ソナタ、作品六〇の（チェロソナタ第三番）でした。

この演奏のときに、トロンツのたいへん有名なテレビ・プロデューサーのフランク・クラマーが居合わせてました。彼は楽屋に観覧のさめぬ様子を訪れてこう言ったのです。「よく聞いてくださいよ。テレビ放映のために演奏してもらわなくてはなりません。本当に見事な演奏でした。これを録音しないなんて法はないですからね。」そこで私たちはその話を承諾し、共演することになりました。実際の収録のためにカメラや録音装置を整える時間を都合し、収録は翌朝行われることになりました。二人でリハーサルをしていると、クラマーが調整

室から出てきて言うのです。「お二人とも実に美しい。でもレナードさん、すごく困ることがあるんですよ。譜面が邪魔で、カメラがうまく撮れないんです。暗譜はしてませんか？ 私は登りました。「ええ、でもグレンは譜面を使っていますけれど」。そこでグレンが振り返って言ったのです。「レナード、暗譜のほうがいいかい。明日、暗譜でやろう」。もちろんグレンは暗譜でやっただけのことでよ！

グレン・グールドは希有な人物の一人でした。ベツト横になつているときで、難なく練習ができ、それからピアノの前に行つて、暗譜で弾いてしまふのですから。しかも、演奏はいつも完璧でした。こんなことができるのは、私の知り合いのうちにほんの二、三人しかいません。同じやり方でスコアを勉強できる指揮者が何人かいます。私は、知っています。でも、オーケストラの指揮にもまして技術的に難しい楽器の前に専ら、譜面を見て勉強しただけでそれを弾きこなしてしまうというのは、並大抵のことではなと思いますよ！ 付け加えていただければ、むしろ美しく演奏されたのですか？

ローズ グレンとは、たった一枚マニア向けのレトロコッドを録音しただけですよ。これはバッハの《ウェイオラ・ダ・カンパ》のための三つのソナタで、とても美しい演奏に仕上がったと思っています。またこれは稀なケース

だと言つてはいいのですが、グレンが気に入るようなスタイルにすんなり合わせる事ができたのです。この時、彼が私よりもこの曲をよく知っているのではありません。三つのソナタの録音はうまくいきましたが、一風変わった演奏になりました。

グレンはバッハ作品の演奏低音のリアーゼーションにかなり、素晴らしい想像力を働かせました。もっと有名なロマン派の作品の共演に出すのは、ブラームスの《チェロソナタ》とペーター・ヴェーバーの長調のソナタです。いずれの場合も、グレンの負がそうというわけではなかったのですが、たいがい私も自己主張をしたのだと申し上げておきますよ。グレンでも奇妙な出来事があったとんでもないようなことができては、音楽的に考えたらとても見下しているから、すまないです。こういうのは、彼を見下しているからではまったくありません。私はグレンをとても尊敬してました。また彼の名ですることすべしては、たしかによい考えぬかれて独断的なことでした。ペーター・ヴェーバーの長調のソナタには、ピアノだけが二小節間スフォルツァンドでトリルを演奏する箇所がありました。二小節のうち二番目は、小節内で、低いデクレシエンダをするように指示されてました。「訳註」第一章の八七一八小節を指していると思われる。同じ部分は再現部でも登場する。この部分にきたとき、私に突然聞かせてきたのは、グレンの弾く恐ろしく速いテンポのパロツク

風トリルだったのです！思うに、これは、ペーター・ウエンの音楽には的外れでまったくそぐわないものでした。ですから彼を置き伏せて、そんなふうには弾くのはやめてもらいました。グレンはこんなことをやってのけてしまった人物だったのですが、共演してとても楽しかったというところは、申し上げておかなければなりませんね。またこの時期、私たちは、オスカー・シュムスキーとともに多数のトリオを一緒に演奏しました。グレンと音楽を通じて、また個人的に付き合ひりとは、とても楽しいことでした。彼は風変わりなところと、とても楽しいところもありました。グレンは坂さんでピアノリストであり、これまでに私が聴いたうちで、もっとも美しい音色の持ち主ではないでしょうか。彼は本当に楽しんでピアノの前に腰掛け、シユトラウスの最後の歌曲や晩年のオペラなどを弾き、弾きながら全てのパートを歌っていたものですよ。これを聞くのは得難い体験でした。

人だと言わなければなりません。これは、もちろん、ブラームスの二重奏の《ピアノ協奏曲》にまつわる有名なエピソードを念頭に置いています。彼がレナード・パーンスタイン指揮のニューヨークフィルで演奏したときのようです。パーンスタインは協奏曲の演奏前に、観客に次のような話をしたのです。この作品の解釈について、グールドとは意見がまるで違っていましたか、そのままで進められたからですと。私自身は、張ることをあらゆる意でできませんでしたが、この件でパーンスタインが正しいか否かについては、今は言いたくありません。でも、何も言わないほうがよかったです。全然違うように弾かれました。

グレンは、名作がこれまでとは全然違うように弾けるピアノリストでした！たとえば、あのドヴォルザークの《チェロ協奏曲》を三、四人の偉大なチェリストの演奏で聴いても、たぶん大同小異でしょう。グレンの手にかかると、他の名ピアノリストの場合とは、まるで違う演奏を聴くことができると思っていますよ！

グールドの録音では、何かお好きですか？

ローズ 彼の録音は、いつでもとも面白かったと申し上げておきますよ。彼に賛同しかねることもよくありましたが、意見の相違を語り合ったり、グレンが自分の演奏をいかに正当化するかに耳を傾けたりするのは、ひじょうに楽しいことでした。グレンは直観的に演奏するタイプでは、まったくおありませんでした。ありとあらゆる

知る限りでも、たぶんもっとも個人主義的な芸術家の一人です。

ローズ そうですね。公平に見積っても、グレンは私のことが、綿密に考えられていたのです。なにも、これがコンピュータのようだとはいわけてはいないのです。いささかもそのようなところはなく、それどころか逆に、たいへん表情豊かな音楽家でした。ただ、他の名ピアノリストが横道に逸れようとはつゆほども考えなかつた場合でも、グレンはそういうことができずしてピアノリストだったというわけなのです。

どいノイロイ性でした。たとえば、ストラトフォードでの共演前のことを思い出します。(ここで付け加えたのは、演奏家はみな、舞台上に歩み出る前に気が重くなるということです。他の人より神経質になる者もあれば、心配症になる者もあります。でも舞台上で弾き始めると気分は変わるのです。)グレンは上でも神経質でした。彼の控え室には、興奮剤やら、鎮静剤やらの瓶がいくつもゴロゴロしていましたね。

グレンは、聴衆にひじょうに左右されやすかったのではないのでしょうか。だから、聴衆の前で演奏するのをやめてしまったのかもしれないですね。コンサートでの演奏が過去のものであり、生きた演奏とはレコードやTVであるという言い訳も、この頃のほうが本当の理由のような気がしますが、私はこんなふうには考えていません。

結局は、あなたがお話したことはみな、レナード・ローズという一人の人間の感じ方に過ぎないことを頭に入れておいてください。グレンとはとても親しくしていましたから、彼を失って寂しくはなりません。

ローズ その質問は難しくして答えられません。誰もそんなことはわからないのですから。グレンは、真贋という見方とはまったく異なる視点でした。たしかに彼が真贋を曲したのとは明らかです。パッツァの《ゴイッテルク変奏曲》の場合がそうです。共演した《ヴォイファ、ベルカガンバのためのソナタ》も、変わってはいませんが、とても面白い録音だと思います。それ以上のことは、申し上げられませんね。グレンは不幸にも、あんなに若くして観客の前で演奏するのをやめてしまいました。彼がコンサートから退こうと決めた理由について、私が憶測していることを知りたいと思ったりスナイもいるかもしれませんが、グレンは、もう聴衆の前で演奏しない言い訳として、公的な場で演奏は、過去のものに思えるからだといつも言っていました。生きた演奏とは、レコードやTVのようなものだとはいったかったです。私には、そうとは思えないですけれどもね！彼は、かなりひ

だと言わなければなりません。これは、もちろん、ブラームスの二重奏の《ピアノ協奏曲》にまつわる有名なエピソードを念頭に置いています。彼がレナード・パーンスタイン指揮のニューヨークフィルで演奏したときのようです。パーンスタインは協奏曲の演奏前に、観客に次のような話をしたのです。この作品の解釈について、グールドとは意見がまるで違っていましたか、そのままで進められたからですと。私自身は、張ることをあらゆる意でできませんでしたが、この件でパーンスタインが正しいか否かについては、今は言いたくありません。でも、何も言わないほうがよかったです。全然違うように弾かれました。

グレンは、名作がこれまでとは全然違うように弾けるピアノリストでした！たとえば、あのドヴォルザークの《チェロ協奏曲》を三、四人の偉大なチェリストの演奏で聴いても、たぶん大同小異でしょう。グレンの手にかかると、他の名ピアノリストの場合とは、まるで違う演奏を聴くことができると思っていますよ！

グールドの録音では、何かお好きですか？

ローズ 彼の録音は、いつでもとも面白かったと申し上げておきますよ。彼に賛同しかねることもよくありましたが、意見の相違を語り合ったり、グレンが自分の演奏をいかに正当化するかに耳を傾けたりするのは、ひじょうに楽しいことでした。グレンは直観的に演奏するタイプでは、まったくおありませんでした。ありとあらゆる